

## P21 歯列咬合の発育への食事の影響－1歳6ヶ月～2歳児の食事について－

The affection of diet for the development of occlusion-About the diet of children (1y6m~2y11m)

○有田信一、竹内あゆみ、友重文子、島田由紀子

Shinichi Arita, Ayumi Takeuti, Ayako Tomoshige, Yukiko Shimada

ありた小児矯正歯科（長崎市）

Arita pedo-ortho dental clinic

はじめに

私たちは、個々の歯列咬合の写真を活用し、どのような食材や調理方法が望ましいのか、保護者と話し合っている。

そこで、今回は、私たちが活用している口腔内写真と歯育て健診受診表から、歯列咬合の発達段階と食事との関連について、考察したので報告する。

\* 「歯育て健診」：長崎市の1歳半健診後のう蝕定期継続管理事業名

対象・調査内容

長崎市内1歳6ヶ月健診を受診後、2007年の1年間（1月から12月）に「歯育て健診」で来院した3歳未満児96名を対象とし、受診表から現在歯、う蝕、歯列咬合の状態、習癖などを調べた。

上下第一乳臼歯の接触状態は、正面・左右・上下の5枚の口腔内写真で判定し、判定が困難な者を除外した82名のデータを用いた。

結果

性別は男子29名、女子67名であった。

平均年齢は1.97ヶ月（1才6ヶ月～2才11ヶ月）であった。

歯列の状態では叢生41名（42.7%）、上顎前突20名（20.8%）、開咬7名（7.3%）、反対咬合12名（12.5%）、過蓋咬合25名（26%）、クロスバイト5名（5.2%）であった。上下第一乳臼歯の接触状態は、上下第一乳臼歯が接触しているもの57名（69.5%）、接触していないもの25名（30.5%）であった。また、この上下第一乳臼歯が接触していない者のほとんどが大人と同じ食事形態であった。叢生は非接触群では14名（56%）、接触群では20名（35.1%）と非接触群に多く認められた。

考察

食品と調理形態の選択が、歯列咬合の発達に関連している事が示唆された。